



## 古きをたずねて (その一)

美唄歯科医師会会員 雨田 実



小生は不幸にして、物心つく前に母が他界したため、母の顔を知らない。関東大震災の折に、母が身重な身体で無理をしたせいで、震災後、難産の末に小生を出産したが、俗にいう産後の肥立ちが思わしくなく、起きることの出来ないままこの世を去ってしまった。

大正時代のことで、授乳のため遠縁にお産後子を亡くした人に乳母になってもらって在で1年と少し世話になって、父親のもとに戻って来たようであるが、小生にはその記憶は全然ないあたり、余り頭は良いほうではなかったようである。病身の母から生まれたせいも、骨細で血色のさえない腺病質の幼児であったので、父親に、今日は剣道、明日は柔道と町道場に数え年4歳から毎日稽古に通わされた。強い左利きであったので、継母が男の子は軍隊に行ってから苦勞しては可哀想だからと、随分苦勞して直してくれたらしく、物心ついた頃には、スプーンも箸も右手で持っていたのを覚えている。しかし物を投げるのと金ツチは現在でも左でなければ自信が持てない。小学校に入学しても、クレヨンも石筆も右手を使っていたが、どの友達と比べてもどうして自分がこんなに絵でも字でも誰よりも遅く、しかも下手なのにビックリしたり、ガッカリして通学が一度で嫌になってしまった。現在なら文字通り格好の獲物で、早速イ

ジメに遭うこと間違いなかったのだが、4歳から町道場で剣道、柔道を習っていたのを、誰かが知っていたのか、本当は弱いのに、強いのかもと勘違いされてイジメられなかった。余りにも不器用なので、一年生から毛筆の習字に通わされたが、半紙に大きな字を4字書くことから始めたように覚えている。筆に墨をたっぷり含ませて胸をはって、右手を机からも身体からも離して書かされた。というところのように聞こえるけれど、のろい上に全然字になっていなかった。教える先生も随分困ったようで、幾日かたってから継母に、息子さん右手に負傷したこともあるのですかと聞いたようで、小生に聞こえないように父に話しているのが小生に聞こえてしまい、父よりも子供の自分のほうがガッカリした。それでも負けず嫌いだったのか？或いは左手に気付かなかったのか、遂に左手で筆も鉛筆も持たないで、今日を迎えるに至っている。

絵を描くのは好きであるが、今でも小学生低学年並みの絵には、自分でもあきれてしまう。字に関しては、親心はありがたい限りと感謝していると言えば聞こえは良いけれど、よくもこれ程多くの筆を持たない人がいるものだと思う程、父親が手紙の代筆を頼まれて来るのか？どうも自分から引き受けて来るように思えてなら

なかった。それもあらずじの下書きでも持って来てくれれば少しは良いが、全然なしで、これとこのことは正確に書いて前後に拝啓と敬具のような字を書けば良いと、字の下手な長男に文章の勉強も合わせてさせての親心とすれば、ありがたいことで、嬉し涙などとてもその頃は思えなかった。

昭和10年頃の小生の育った辺りは、尾崎士郎の人生劇場残俠編の舞台によく出てくるようなところで、遠くに千住の東京電力の火力発電所の4本の大きなオバケ煙突が立っており、明治44年から20年かけて掘られたという荒川放水路の20キロの堤防が果てしなく続いていた。昭和30年頃の「煙突の見える場所」という映画の題名そのもので、横町から吉良常や宮川が顔を見せても少しも不思議のないような町並みであり、銭湯に明るいうちに行けば、遠山の金さんの桜吹雪や白粉彫（おしろいぼり）の見事な朱の芸術をただで見せてもらえた。その頃は、それが何という唄かまるで理解出来なかったが、だんだんとそれが都々逸という粋なものと知ったけれど、彫物の似合ういなせな人達の粋な声を眼を細めて聞いた。早く母親に別れたせいかな、随分ませた子供であつたらしい。その時分、夏になると月に1度位は町内で舟を調達して、朝早く荒川放水路を海に向かって下った。目的地は

東京湾の浦安海岸（現在ディズニーランドの出来た遠浅の海岸）で、潮干狩りを半日以上して午後の満潮を待って逆流する荒川放水路を逆登る。どの位上流まで川が逆流するか定かでないが、戸田橋辺りまでと聞くから20キロ以上あるであろう。時速は10キロ以上はあったと思う。その間にも、仲の良い友達と数名で親に内緒で、月に2回位は弁当と水筒だけ用意して自転車で堤防伝いに浦安まで無銭潮干狩りに出かけたものである。小学生や中学低学年の頃の体力のため、行きは良いけれど、さすがに帰りはこたえてもう来ないぞと何度も思ったことであつたが、2週間もすると、誰いうとなくまた行こうとなつて、夏中は何度も出掛けたものである。

今考えれば、よくけがもせず、交通事故一つ起こさずに過ごせたものだししみじみと思ひ今になって神仏に感謝している。それにしても60年後の時代にまさかこの浦安海岸に、一大レジャーランドのディズニーランドが造られるとは、誰もが夢にも思わなかったのは当然であろう。大人が行っても結構楽しめるといわれているが、残念ながら小生一度も見物に行っていない。お迎えの来ないうちに今昔の感にひたりに行ってみようかと思つているが果たして……。